研究余録

芥川龍之介の別名

森本修

宇野浩二によれば、芥川龍之介が文壇にデビューして忽ち既成の大家に伍す花形作家としてもてはやされるに至ったのは、一に『芥川龍之介』といふ、ぱつとした、派手な、名前が大いにあずかつてゐた」と云っても決して過言ではない、という。大正の中頃、姓名判断に凝っていた宇野の友人鍋井克之が、「ある時、『……芥川龍之介、……芥川龍之介、……ふむ、ええ名前やなあ、……徳な名前やなあ、……芥川龍之介、桃井若狭介、市村羽左衛門、といふやうな、ぱつとした、派手な、名ァあ、なんとなう、好いたらしい、男前らしうて、ええ名前や、徳な名前や、』と、いつた事がある」と伝えられている（宇野浩二「芥川龍之介」）。それはとにかくとしても、芥川は作家生活に入っても雅号を殊更に用いず、本名をペンネームに兼ねていた。これは、同時代の菊池寛や久米正雄にしても同様で、彼等が文壇に出た前後からこの傾向は強まっていた。もっとも、菊池は習作期に草田杜太郎というペンネームや、比呂士・比呂志を用いたことがあるし、久米も三汀という俳号で俳人としてよくしられていた。では、芥川はそういった別号を全く用いなかったのかというと、そうではなく、後述のように雅号については人一倍興味をもっていたし、書簡・随筆等には好んで用いている。筑摩書房版の「芥川龍之介全集」の第八巻に付載されている別名索引には、芥川が生涯に用いた別名約八十があげられているが、この数は芥川の別号に対する関心の度合を示す一つの例証といえよう。もっとも、この中には号といゝ難いものもある、が、これら別名の一つ一つにも芥川の博識と、機智に富んだ一面がいかんなく示されている。しかし、前記索引にあげられているものが芥川の別名のすべてではない。そこで、この索引に脱落しているものを補うと共に、それらの由来について記してみたい。

芥川の数多くの別名の中でもよく知られているのは柳川隆之介、我鬼、澄江堂の三つである。

柳川隆之介は、大正三年二月創刊、十月に廃刊になった第三次「新思潮」同人の頃用いていたペンネームである。芥川がこのペンネームで書いたものに小説「老年」、戯曲「青年の死」、翻訳「パルタザアル」「春の心臓」「『ケルトの薄明』より」、書評「『未来』創刊号」等がある。柳川隆之介当時の芥川は、まだ本格的に創作をはじめる気持はなかった。

我鬼は、海軍機関学校の嘱託教官時代に、塚本文と結婚（大正七・二・二）して新居を鎌倉に構えていた頃、近所に住む高浜虚子の指導をうけて「新進俳人」を自称する程俳句に熱をあげ、大正七年六月の「ホトトギス」

に三句掲載された時に用いた号である。菊池寛によれば、芥川は我鬼の「謂れを訊かれる毎に『君、支那人は自我と云ふ意味を、我鬼といふのだ。滇は支那人丈あって、うまく云つてあるだらう』と、何時でも得意になって説明」していたという（菊池寛「我鬼」）。もっとも、我鬼の号は「ホトトギス」に三句掲載された時にはじめて用いたものではなく、これより早く大正六年十二月十一日付、七年三月五日付の書簡にみえている。大正八年三月、海軍機関学校の職を辞して創作一本で生計をたてるため、鎌倉から田端へ引上げて以後、芥川はその書斎を我鬼窟と称し、書簡にも専ら我鬼と署名するようになった。なお、我鬼の形を変えたものに我鬼先生、病我鬼、我鬼散人、牙旗生、我鬼窟主人、我鬼山人、我鬼山房主人、我鬼居士、癡我鬼、我鬼老人我鬼老衲等がある。この中で最も多く用いているのは病我鬼で、大正九年一月、九月、十年八月、十月、十一年十一月と、風邪をひいて寝込んでいた時には必ずといってよい程用いている、書簡にみえる我鬼の号は、十二年四月十三日付のもので終っている。

書簡の署名に我鬼を用いなくなる一年位前大正十一年春頃から芥川は書斎の額を改めて澄江堂と号していた。澄江堂は、隅田川に因んで号としたものであるが、芥川は「僕になぜ澄江堂などと号するのかと尋ねる人がある。なぜと言ふほどの因縁はない。唯いつか漫然と澄江堂と号してしまったのである。いつか佐々木茂索君は『スミエと言ふ芸者に惚れたんですか?』と言った。勿論そんな訳はない。僕は時々本名の外に入らざる名などをつけることは好せば好かつたと思つてゐる」（続澄江堂雑記）といっている。また、十一年四月十八日付の書簡には「この頃僕書斎の額を改めて澄江堂となす小島政二郎曰澄江と云ふ芸者にでも惚れたんですか僕曰冗談に云つちやいけない書斎に名づける程の芸者が日本にゐてたまるものか」ともいっている。我鬼窟から澄江堂への改号の理由を尋ねたのが、二つの文章では佐々木茂索であったり、小島政二郎であったり、また「唯いつか漫然」と改めたなどといっているが、何か理由があったのに違いない。芥川は大正十年三月から七月にかけての中国旅行以後、頓に健康が衰えてきたので、厄払いの意味から改号したという説も考えられる。我鬼と同じく澄江堂の形を変えた署名として、澄江堂主、澄江堂主人、澄江堂老人、澄江老人、澄江子、聴香洞主、澄江生、いでゆもすみえ太夫、たばたやすみえ、澄などが書簡にみえている。十四年一月以後は澄の一字を専ら用いているが、これも十五年三月以後は昭和二年五月十七日付の書簡に唯一度用いているのみである。

我鬼、澄江堂の他、書簡に最も多く、長期間に亘って使用されている署名に龍がある。龍は、現行全集に収められている書簡では、明治四十三年府立第三中学卒業前後から、大正十五年鵠沼に滞在していた時までみられるもので、芥川が最も愛用していた署名である。

以上の他、芥川が用いていた別名を年代順にあげてみよう。

芥川が最も早く用いた別号は、小学生の頃（明治三十五年四月から約一月間）同級生と出していた回覧雑誌「日の出界」掲載の文章に用いた龍雨・渓水であろう。また、別号とはいゝ難いが、この頃書いた押川春浪ばりの冒険小説の作中に「立田川雄之介（実は芥川龍之介）」というのがみえる。立田川といえば、大正六年十月の書簡に「嘗て私は電話で

立田川と云ふ相撲と間違へられた事があります」とある。現行全集では中学校・高等学校・大学在学中には、柳川隆之介以外に別号を用いた例は見当らない。芥川が別号を盛んに用いだしたのは、大学卒業の後である。

まず、大学を卒業した翌月の大正五年八月九日付の書簡に、残夜水明楼主人というのがある。これは、杜甫の「四更山吐」月、残夜水明レ楼」からとったものであろう。

翌六年五月一日、論文（何をさすか不明）を書了えたゆとりから、宇治紫川の号で一世一代の作という一中節の新曲「恋路の八景」を書いて秦豊吉に送っている。宇治紫川の号は、芥川の養家の父母や伯母が習っていた一中節の師匠宇治紫山をもじったものであろう。芥川は、この「恋路の八景」を「渋しくして余情ありまことに江戸趣味の極まれる」ものと自画自讃している。

椒図道人、これは大正六年十一月二十五日付の書簡にみえている。「後年の書きほごし原稿『白獣』の昌頭によれば、『嘗、椒図と云ふ号をつけた事がある。椒図とは、八犬伝によると『黙するを好む』龍だと云ふ。そこでこの号を得意になって、椒図居士とか何とかつけた』事があるとなっている」が、現行全集では椒図を冠した号はこの書簡以外に見当らない（葛巻義敏「芥川龍之介ノート『椒図志異』解説」）。

大正六年頃の作品「Liesin Scarlet」の訳者として羽賀宇阿（ハガタクア）というのがある。羽賀宇阿は、逆に読めばアクタガハという酒落で、九年十一月一日付の書簡にも羽賀宇阿入道と署名したものがある。また。これに類するものに、十三年頃の書簡に利宇乃須計（リウスケ）と署名した（真赤な嘘）ものがある。なお、吉田精一氏は「Liesin Scarlet」の原作者として記されているArthur Halliwell Donovanも、外国人らしく作った芥川のペンネームではないか、とされている（筑摩版全集　第六巻註）。

大正八年十月二十一日付、佐々木茂索宛の書簡に「号を何とかつけないかね手紙をかくとき無風流でかけないから澄心亭主人とか緑梅洞々主とか僕の持合せの号を進上しようや」と書いている。佐々木茂索によれば、芥川は「大正八年乃至十年頃までは澄心亭、或ひは緑梅洞、或ひは了中庵等を我鬼と共に用ひてゐた」といわれているが、現行全集では用いられている例はない（佐々木茂索「無題」改造　昭二・九）。

寿陵余子、大正九年一月から五月にかけて発表した「骨董羹」に用いている。芥川は、この号の由来を「寿陵に余子あり歩を邯鄲に学ぶ未邯鄲の歩ならざるに寿陵の歩を忘る即蛇行匍匐して帰るとか何とかふ云文章が韓非子にあるから拵へた号です余子は唯青年と云ふ意味でせう僕自身西洋を学んで成らずその内に東洋を忘れてゐる所が邯鄲寿陵両所の歩き方を学び損なつた青年に似てゐると思つたからです」と書いている（大正九・三・三十一書）。

桃*実居士、大正九年四月、芥川は或女性に宛てた手紙を取違えて岡栄一郎に送ったことがあった。岡が、その取違えられた手紙を返送したところ、芥川は返事代りに「桃煙る中や寛の水洩るゝ」の句と、「手紙の中が違つてゐやうとは思はなかった閉口の余句を作る」という言訳とを表裏に認めて送った。桃実居士は、その言訳の方に署名したものである（岡栄一郎「芥川の短冊」文芸春秋　昭二十九・三）。

芥川の第五短篇集に「夜来の花」（新潮社大十二・三）があるが、これに因んだ号として

この集より早く夜来花庵生（主）（大九・七～十・八書簡五通）がある。また、大正十年二月十九日付の書簡に夜来洞主と署名したものもある。

三拙漁人（大九・二十二書）、三拙生（大九・十一・十六書）は、三絶をもじったものであろう。即ち、三絶とは三種の技芸（画・詩・字）の卓絶せるものをいう。

芥川が「秋」を書いていた頃、大正九年十二月三日付の書簡に「この頃人に四王呉惲の画集を借りました南田が一番好いやうです」と書いている。この「南田」にヒントを得たと思われる号に雲田がある。芥川は「大分諸君子にひやかされ」ながら雲田という号をつけ、九年十二月六日、十日、二十九日付の書簡に用いたが、小沢碧童に「雲田の号は嫌味があるといわれて、「もう少し考へた上つける事にしませう」といっていたが、以号この号は止してしまった。同じ頃、雲田を酒落た雲田屋我鬼兵衛、小函嶺隠士雲田というのがある。小函嶺の「函嶺」は、いうまでもなく箱根を中国風によんだ語であるが、これは芥川の住んでいた田端の家の近所にあった切通しの路を通った男が「箱根のやうだね此処は」と云ったのを聞いて、「ボク貧乏なりと雖も名勝函根の如きものの側に住んでりや光栄」と、早速「小函嶺隠士雲田」と酒落たものである。

また同じ頃、小沢碧童が最仲という号をつけたのを知った芥川は、「日本雅号を一つつけたいと思っていろいろ考へて」いた。芥川によれば「雅号に二種あり一は支那直輸一は日本特製でありますつまり漱石は前者最仲は後者」で、「光悦の子の空中、小堀遠州の宗中、なぜ中の字の号が好いと思っても最仲の向うを張る程のは一つも遭遇しない」のだった。そこで、中のつく号をいろいろ考えた挙句、「且中としようかと思つたが未定、中の字のつく号は悪くすると男芸者じみるのでむづかしい　昌中　玄中　童中　呆中　寂中　景中　素中　了中、皆落第　昌中はどうかと思つたがこれも亦未定田中と云ふのを考へたらタナカだったので困つた」。「姓名判断によると了中と云ふ号が好いさうですが何だか男芸者じみる為ためらつてゐます」、「円中名号ナリ円中ニショウ」と云っていた。そして、大正十年一月三十、三十一日、小穴隆一、小沢碧童、遠藤古原草等と千葉県布佐で遊んだ時、四人で合作した「布佐行絵巻」に芥川は了中、小穴が円中、小沢が最中、遠藤が清中と各々中のつく号を用いている。書簡では未生子旦中、了中庵の二つを用いているが、中のつく号はこれで立消えとなった。もっとも、この時から一年半を経た大正十一年八月九日付書簡に風中龜生というのがみえている。

以上の他、作品に用いたものに大正十二年三月発表「八宝飯」の一部分に瑯玡山客、十二年六月発表「思ふまゝに」浅香三四郎、十四年四月発表「念仏波念遠入帖」の大鵬生等がある。また、書簡の署名には居所田端に因んだ田端奉行（大十一・八・二十六）田端之河童（九・十・二十一）たばたやすみえ（十四・五・一）、柚の本の鳥麻呂（十・十・十）椎本石麻呂（十一・三・十九・十一・三・二十六）ニハタヅミの辰マロ（十三・五）、「蔓性神経衰弱ヲ酒落レテ号トシタルモノト心得ラルベシ」と註のついた曼青（十四・五・二十九、昭二・七・八）同じく蔓性胃腸病の悩みを酒落に維兆曼青居士（十五・一・二十七）、隣家の香取秀真に宛てた堂奈利須無子（トナリニスムコ）（十三・四・二十）、芥川が可愛がっていた朔の葛巻

義敏に宛てた書簡にはリウ大人（十三・八）江良以叔父（十三・八・二十三）龍殿さま（大十五）等があり、長男比呂志が生まれた時、既に二人の子の父となっていた恒藤恭に宛てた書簡に一人の子の父（九・四・二十七）、藤沢清造宛に「権現様まゐる」として八幡（十一・十・十四）、風貌による愛称ヘチマ（昭二・五・二十四）等がある。

しかし、大正十五年九月十六日付の書簡に澄と署名して以後、芥川は書簡にもあまり別名を用いなくなり、芥川龍之介・芥川・龍之介と署名するようになった。十五年九月十六日以後では、昭和二年五月十七日付の澄、二十四日付の龍・ヘチマ、自殺の約二週間前に憂青と署名したものを数えるのみである。

芥川が別名を用いなくなったことを、死の決意と結びつけてみるのはやゝ飛躍した見方であるが、「ごまかし」から「真実」を語ろうとする態度に苦しみ、進んでいたといわれる晩年の芥川の一面を示している、といえるのではなかろうか。

文中＊印を付したものは、筑摩版全集索引に収められていないものである。

受贈誌（三四・四―九）

日本文学　五・六月　日本文学協会
国文学　五―十月　学燈社
国文学　二十五・二十六　関西大学国文学会
言語と文芸　四―六号　東京教育大学国語国文学会
中大国文　二号　中央大学国文学会
万葉　三十一・三十二号　万葉学会
国語学　三十六・三十七　国語学会
国文学研究　十九・二十集　早稲田大学国文学会
語文　七輯　日本大学国文学会
甲南国文　四号　甲南女子短期大学国語国文学会
女子大国文　十三・十四号　京都女子大学国文学会
立教大学日本文学　二号　立教大学日本文学会
京都府立大学国語国文学会誌　創刊号　京都府立大学国語国文学会
古典　八号　明治書院
説林　Ⅳ　愛知県立女子大学
季刊国語教室　十・十一号　国語教室友の会
名古屋大学国語国文学　二号　名古屋大学国語国文学会
山辺道　五号　天理大学国文学研究室
文学論輯　六号　九州大学文学研究分校
実践文学　七号　実践文学会
明治学院編叢　五十三輯　明治学院大学文学会
実践国語教育　二二一・二二二　穂波出版社
文学論藻　十四　東洋大学国語国文学会
人文論究　十九号　北海道学芸大学函館人文学会
ビブリア　十　四　天理図書館
法文論叢　十一号　熊本大学法文学会
語文　二十二　大阪大学国文学研究室
日本文学誌要　三号　法政大学国文学会
人文学報　十九号　東京都立大学人文学会
十二集　聖心女子大学
十七号　駒沢大学
国学院雑誌　四―七月　国学院大学
文学篇六　金沢大学法文学部
七号別刷　大阪学芸大学
八巻一号　奈良学芸大学
島根大学法文論集　島根大学
研究紀要　創刊号　大阪学芸大学紀要
研究論集　近松の研究と資料　奈良学芸大学紀要
資料目録　十六ノ二　演劇研究会
人文科学研究　十二号　同志社大学人文科学研究所
善本写真集　第九号　明治大学人文科学研究所
層雲　五―十三　新京都文学会
天理図書館　十三・十四　天理図書館
静嘉堂文庫　通信　日本文学研究所
島本恵也　大阪短期大学
菰池佐一郎　家蔵鷗外書目（未定稿）

随想

清水泰先生につながる思い出

佐々木曠一

十年一昔と云うが三十余年の昔、禿頭の老漢である私も紅顔の一年少学徒であった頃、先生は我々の為に「堤中納言物語」を講ぜられた。「はいずみ」「虫めづる姫君」「逢坂越えぬごん中納言」などなど、興味深く講ぜられるに従って我々は引入れられて行った。その頃の、あのものやわらかな、温厚そのものと云ったような、それでいて、しんは飽くまで強じんな先生の講義振りが眼の前に浮ぶようである。

卒業後も私は同じ学園の中学校・高等学校に一国語教師として奉転し、公私共に色々御指導を受けた次第である。

教師生活に入って二三年目から文学科の卒業学年の学生が教育実習の為に清水先生につれられてよく北大路の中学校に授業参観にやって来た。卒業生と云っても二部の学生で、多くは小学校の教員である。現場でたたき上げた教育畑の猛者連ばかりだった。それが授業参観が終っていざ批判会と云うことになると、うるさい小姑のような皮肉な批評を、ちくりちくりと飛ばしてくる。こちらは経験わずかに二三年だから心細いことである。然しとにかく曲りなりにも毎年の批評会をこぎぬけている中に二部の学生が段々少くなって今日のような教育実習の制度が出来上ったのである。

その頃の小学校の教師には所謂師範教育で固ったような、こちこちの型にはまった、師範臭のぷんぷんするのがずい分居たものだ。そんな連中がある時例の授業参観の批評会の席上高遠な教育理論を弁じた後奇妙な発言としたものである。

「古人のソウカス（糟粕）をなめる」

「ツマッジ（つじつま）の合わぬ話云々」

私は何も些々たる片言隻句を捕えてあげつらう気持は少しもない。然し百万言の長広舌よりも、大上段の教育理論よりも、たった一つの常識の方が大事な場合があり得ると云うことが言いたいのである。子供にとって大切なのは、百万言の教育理論でも、懸河の弁でもない。基礎的な、常識的な、本源的なもの、これが欠けて居ては滔々たる熱弁も何するものぞ、子供にとっては仏造って魂入れずである。師範教育に何か一本足りないものがあったように感じられるのである。清水先生も恐らく苦突して居られた事と思うのである。

教育実習にはその他色々の思い出がある。ある時、実習生の授業を取り上げて批判検討した事があった。（本来ならばこれが本当の教育実習の姿なのだが古い時代にはこれが逆の形で行われていたのだ）私は此の授業を十分余りしかのぞいて居らなかった。然し批評会の席上では十分間の所見でもこれだけの角度からこれだけの批評が出来るものだとばかりに、いささか得意になりながら一席弁じたものである。清水先生は黙ってこれを聞いて居られたが、「批評と云うものは最後迄聞いてからするものです」と一言ぴしりと言はれた。手痛い批判だった。今だに忘れられない。温厚の君子人たる清水先生にもきびしいのがあることの片鱗である。

終戦後間もなくの頃、先生は田中重太郎氏と共に平安文学会を興して居られた。戦中戦後の葱忙の間私は私の生活を追うのに精一杯